



令和8年7月27日(月)
しなやかに生きる子ども

5学年 社会科
「これからの食料生産」

「肉が食べたいけれど、培養肉の研究も進めないと。」

社会科では、社会的事象について、自分なりの答えや解決方法を模索し続ける学びを目指します。「これからの食料生産」では、日本の畜産業が抱える問題や、世界的な食料不足を解決するために、従来の肉、代替肉、培養肉のうち、どの分野に力を入れていくべきかを議論しました。自分の考えた割合をメーターに表し可視化することで、他者との考えの違いから、目的意識をもって交流に臨むことができました。食の嗜好、培養肉に対する心理的抵抗感、安全性など、個人の価値観が大きく異なる問題を設定することで、他者との考えの違いを生み、交流する中で自分の考えを深めることができました。

私たちは、自分の意思をもって粘り強く学ぶ力強さと仲間の考えを受け入れながら学んでいく柔軟さを兼ね備えた「しなやかに生きる子ども」を育みます。そのために、他者とながら合い、「楽しい」を見いだす学びを大切にしていきます。多様な個を認め、高め合いながら学べるように「教材化」「教師の立ち位置」の二つの視点から、子ども一人一人を大切に授業の在り方を探っていきます。

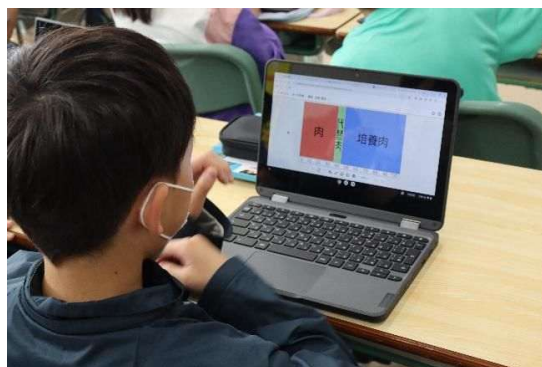
社会科 5年「これからの食料生産」より

視点1

多様な個が生きる教材化

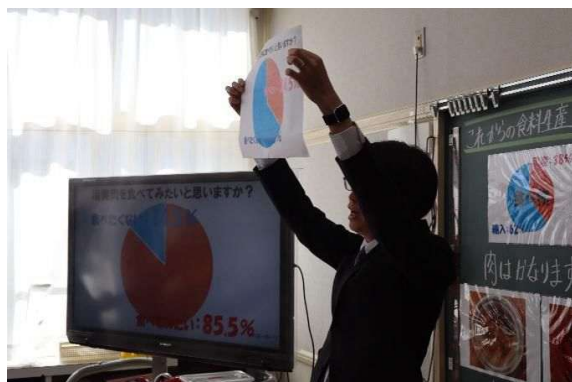
本単元では、国内の食料自給率の割合で作ったラーメンの画像や、飼料の輸入がなくなった場合の画像を提示することで、子どもたちに「大豆が減ったからスープがほとんどない。」「肉が食べられなくなるかもしれない。」と、日本の食料は危機的状況にあるという共通認識をもたせることができました。食料自給率という実感をもちににくい題材を扱いましたが、生活経験と学習内容を結びつける資料提示により、共通の土台を作って単元を展開することができました。

本時では従来の肉、代替肉、培養肉の中から、どの分野に力を入れていくか議論する活動を設定しました。個人の価値観が大きく異なる問題を設定することで、他者との考えの違いを生み、交流する中で個の考えの深まりを生むことができました。



多様な個が生きる教師の立ち位置

視点2



従来の肉、代替肉、培養肉のうち、日本はどの分野に力を入れていくべきか、それぞれの割合をメーターに示して可視化することにより、子ども同士が他者の考えを把握し、目的意識をもって交流に臨むことができました。

追究の視点を定めて調べ学習を進めると、子どもたちは自分の調べていること以外に視点が向かなくなり、自己完結してしまうことが多々あります。従来の肉の研究を進めるべきだと主張する子に対しては、2040年までに、全世界の肉類消費量のうち半分以上が代替肉や培養肉になるという予想のグラフを、培養肉の研究を主張する子に対しては、「培養肉を食べてみたいか」「日常的に培養肉を食べたいと思うか」というアンケート結果を提示することで、反対の側面からもう一度事象を見つめ直し、自分の考えを深めるきっかけを生むことができました。